

Title	エマニュエル・レヴィナス：自己準拠としての非人称の存在 (イリヤ)
Sub Title	Emmanuel Levinas : l'être anonyme (l'il y a) comme autoréférentiel
Author	時田, 圭輔(Tokita, Keisuke)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2022
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.122, (2022. 6) ,p.169 (76)- 176 (69)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01220001-0169

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

エマニュエル・レヴィナス： 自己準拠としての非人称の存在（イリヤ）

時田圭輔

現在、レヴィナスは20世紀を代表する哲学者の一人だと考えられている。フッサール、ハイデガー、サルトル、ブランショなどの影響を受けつつ、レヴィナスは数多くのテキストを執筆した。1935年に「逃走について」というテキストを『哲学研究』誌で発表し——興味深いことに、このテキストはジョルジュ・バタイユの「迷宮」の直後に掲載されている——、1946年に論文「イリヤ」（または「ある」¹）を『ドゥカリオン』誌で公表した。そして1947年に『実存から実存者へ』、「時間と他なるもの」を公刊し、1961年に『全体性と無限』という代表作を、1974年に『存在するとは別の仕方、または存在の彼方へ』という第二の代表作を出版した。レヴィナスはこのように数多くの著作を執筆したが、その哲学は顔、倫理、他性、無限、身代わり、存在といった概念で現在広く知れ渡っている。

レヴィナスが30年代および40年代に特に強い関心を持って考察していたことの一つは存在であり、レヴィナス哲学のなかで存在は本質的な地位を占めている。レヴィナスが存在をどのように考えていたのかを知るために重要なテキストは少なくとも二つある。一つ目は「逃走について」である。というのも、ハイデガーの存在論を意識しつつ——但し、その名を挙げることなく——、レヴィナスはそこで自らの存在概念を初めて提示しているからである。二つ目は、「逃走について」の11年後に発表された論文「イリヤ」である。というのも、レヴィナスはそこで非人称としての存在をまとまった仕方ですべて初めて問題にしているからである。

さて、後に見るように、レヴィナスは「逃走について」で存在をそれ自体に準

拠しているもの、換言すれば自己準拠だと見なしている。そしてこれもまた後に見るように、論文「イリヤ」のなかでレヴィナスは存在を非人称だと見なし、この存在をイリヤと呼んでいる。一つ目のテキストは1935年に発表され、二つ目のそれは1946年に公刊されているのであるから、前者での存在の考え方は後者のなかにならぬのかで反映されていると推測される。とすると、論文「イリヤ」での非人称としての存在、換言すればイリヤは自己準拠だと考えられているのではないか。本稿はこの仮説を証明することを目指す²。まず「逃走について」でのレヴィナスの存在の考え方と論文「イリヤ」でのそれを確認し、次にこの二つ目のテキストに注目しつつ、上記の仮説を立証する。以下、順を追って論じていく。

I. 「逃走について」と論文「イリヤ」でのレヴィナスの存在の考え方

レヴィナスが「逃走について」で存在をどのように考えているのかを確認しよう。レヴィナスはこのテキストの第一章でこう書いている。

このように、逃走の欲求にとって、存在は自由な思考がおそらく飛び越えなければならない障害物のようなものとして、習慣的な行動へと誘い込む、独自性の努力を要求する厳しさのようなものとして現れるだけではなく、そこから外へ出るところの投獄のようなものとしてもまた現れる。存在は、他の何ものにも準拠することなく肯定される絶対的なものである。それは同一性である。しかし、この自己そのものへの準拠のなかで、人間は二元性のようなものを認める。人間の自己そのものとの同一性は論理的あるいはトートロジーといった形の性質を失う。この同一性は、私たちが後に示すように、劇的な形をまとう。自我の同一性のなかで、存在の同一性は繫縛という性質を示す。というのも、存在の同一性は苦しみという形で現れ、逃走へと誘うからだ。だから、逃走は自己そのものから外に出る欲求である。つまり、もっとも根源的で、もっとも容赦のない繫縛を、自我が自己そのものであることを断ち切る欲求である³。

「繫縛」と「逃走」という語はレヴィナス哲学を理解するために重要な語である

が、本稿にとって肝要なことは「存在は、他の何ものにも準拠することなく肯定される絶対的なものである。それは同一性である」という文章である。このことから、レヴィナスが存在をそれ自体に準拠しているもの、つまり自己準拠だと考え、この存在に同一性という名を与えていることがわかる。

次にレヴィナスが論文「イリヤ」で存在をどのように考えているのかを確かめよう。「闇」という章の冒頭でレヴィナスはこう述べている。

すべての存在が——事物と人間が——無に帰すことを想像しよう。この無への回帰をあらゆる出来事の外部に置くことは不可能である。しかし、この無そのものはどうだろうか。たとえそれが闇であれ、無の沈黙であれ、何かが生じる。この「何かが生じる」ことの不明確さは主体の不明確さではないし、実詞 [substantif] に準拠してはいない。この不明確さが指し示しているのは、動詞の非人称形での三人称代名詞のように、明確ではない行為者ではなく、いわば、行為者を持たない、匿名なこの行為それ自体の性質である。存在の非人称で、匿名だが消し得ないこの焼尽、無それ自体の奥底で囁くこの焼尽、私たちはそれをイリヤ [ilya] という語で明示する。イリヤは、人称形を取ることの拒絶において、「存在一般」である⁴。

注目したいのは引用文の最後の一文である。イリヤは「人称形を取ることの拒絶において」、つまり非人称であり、「存在一般」である。それゆえ、大まかに見て、レヴィナスは存在を非人称として考え、この存在をイリヤと呼んでいると言える。

レヴィナスは「逃走について」で存在を自己準拠だと考え、この存在に同一性という名を与えている。そして論文「イリヤ」で存在を非人称だと見なし、この存在をイリヤと呼んでいる。冒頭で述べたように、一つ目のテキストは1935年に発表され、二つ目のそれは1946年に公刊されているのであるから、前者での存在の考え方は後者のなかに何らかのしかたで反映されていると推測される。とすると、論文「イリヤ」での非人称としての存在、換言すればイリヤは自己準拠だと考えられているのではないか。次に、論文「イリヤ」でのレヴィナスの記述に注目しつつ、このことを明らかにしよう。

II. 非人称としての存在（イリヤ）—— 自己準拠

論文「イリヤ」は「存在一般」、「闇」、「存在の恐怖」、「イリヤと無」という4章から構成されており、1946年に『ドゥカリオン』誌に掲載されたが、その執筆時期に関しては少なくとも二つの可能性が考えられる。一つ目は、この論文が掲載された年に書かれたとする考え方である。つまり、1946年に書かれたとする考え方である。二つ目は、1940年から1945年の5月までの捕囚期（周知のようにこの期間の間、レヴィナスはフランス軍の通訳兵として捕囚されていた）に書かれたとする考え方である。というのも、論文「イリヤ」は1947年に公刊された『実存から実存者へ』での「序論」と「世界なき実存」と題された章の「実存者なき実存」という節に分割されたしかたで収録されているが、この書物の大部分は1940年から1945年の5月までの捕囚期の間にかけて書かれているからである（「戦前から始まったこれら全ての探究はその後も続き、その大部分は捕囚期に執筆された⁵」。レヴィナスはこのように『実存から実存者へ』の「前書き」で書いている）。とはいえ、現在までに公開されているレヴィナスの資料から、論文「イリヤ」の具体的な執筆時期を特定することはおそらく困難だろう。

それはさておき、レヴィナスは論文「イリヤ」のなかで非人称としての存在を自己準拠だと考えているように思われる。

まず、指摘したいことは非人称としての存在、言い換えればイリヤが存在者に準拠してはいないことだ。第一章で引用した文章をもう一度読もう。

たとえそれが闇であれ、無の沈黙であれ、何かが生じる。この「何かが生じる」ことの不明確さは主体の不明確さではないし、実詞 [substantif] に準拠してはいない。この不明確さが指し示しているのは、動詞の非人称形での三人称代名詞のように、明確ではない行為者ではなく、いわば、行為者を持たない、匿名なこの行為それ自体の性質である。存在の非人称で、匿名だが消し得ないこの焼尽、無それ自体の奥底で囁くこの焼尽、私たちはそれをイリヤ [ilya] という語で明示する⁶。

「この『何かが生じる』こと不明確さ」という表現でレヴィナスが言いたいことは、文脈から考えるとおそらく非人称としての存在（イリヤ）のことだろう。

とすると、レヴィナスはこの非人称としての存在が「実詞に準拠してはいない」と述べていることになる。

「実詞」と訳したフランス語の *substantif* は「名詞」としても訳出されることがある語だが、一般的には言語学に属する用語だろう。とはいえ、レヴィナスにおいて、この語は存在者を意味している。「存在一般」という章のなかでレヴィナスはこう述べている。「しかし、こう問うことができる。存在への『存在者』のこの加入は瞬間のなかで単に与えられるのかどうか、この加入は瞬間の滞留 [*stance*] そのものによって成就されないのかどうか、瞬間は、存在するという純粋な行為のなかに、純粋な動詞のなかに、存在一般のなかに、その主人となる『存在者』が、実詞が置かれる [*se pose*] 出来事そのものではないのかどうか、瞬間は存在一般の『分極化』 [*polarisation*] ではないのかどうか」⁷。この引用文のなかでレヴィナスは「存在者」を「実詞」という語で言い換えている。それゆえ、レヴィナスはこの語を存在者の意味で使っている。

このことを念頭に置いて問題となっている引用文に戻ると⁸、レヴィナスは非人称としての存在（イリヤ）が「実詞に準拠してはいない」、つまり存在者に準拠してはいないと述べていることになる。

このように、レヴィナスは非人称としての存在、言い換えればイリヤが存在者に準拠してはいないと考えている。ではそれは何に準拠しているのか。

着目したいことは、「存在の恐怖」という章で現れるレヴィナスの記述である。この章の冒頭でレヴィナスは非人称としての存在、換言すればイリヤが自我に触れることを恐怖だと述べている。「イリヤがそっと触れること、それが恐怖である」⁹。そして、この引用文の後で、レヴィナスは再び恐怖を問題にしている。

それ [主体] は非人称化されている。存在の感情としての「吐き気」はまだ非人称化ではない。しかしながら一方で [*alors que*] 恐怖は主体の主体性を、存在者というその固有性を転覆させる。恐怖はイリヤへの融即 [*participation*] である。あらゆる否定のただなかで回帰するイリヤへの、「出口のない」イリヤへの融即である。そう言えるのであれば、それは死の不可能性、その無化のなかにまで広がる存在の普遍性である¹⁰。

「死の不可能性」という表現はハイデガーの「死は現存在の絶対的な不可能性の

可能性である¹¹」という一文に関わると思われるが、重要な点はそこではない。引用文のなかで、レヴィナスは「存在の感情としての『吐き気』はまだ非人称化ではない」と述べ、それとの対比として「恐怖は主体の主体性を、存在者というその固有性を転覆させる」と書いている。それゆえ、レヴィナスが言いたいことはおそらく恐怖において自我が非人称になる（簡単に言ってしまえば、自我からその一人称が剝奪される）ということだろう。そうだとすると、先に見たように、恐怖は非人称としての存在（イリヤ）が自我に触れることであった¹²。だから、恐怖においてこの非人称としての存在が自我を非人称にする（自我からその一人称を奪う）。

このような主張の直後でレヴィナスは「恐怖はイリヤへの融即 [participation] である¹³」と書いている。融即という語はレヴィナスがレヴィ＝ブリュールから借用した語である。レヴィナスはデュルケイムの聖なるものに言及し、融即に関してこう書いている。「レヴィ＝ブリュールにおいて、事情は全く異なる。プラトンの類への分有 [participation] とは根本的に区別された、神秘的融即のなかで、諸項の同一性は失われる。諸項からその実体性そのものを構成しているものが剝ぎ取られる。ある項が別の項に融即すること [participation d'un terme à l'autre] はある属性を共有しているということではない。ある項は別の項である [un terme est l'autre]¹⁴。ある項が別の項に融即することは、「ある項は別の項である [un terme est l'autre]」ということだ。レヴィナスは「である」と訳したフランス語の est を強調しているが、この語の原形は être であり、それは同一性を意味している。従って、ある項が別の項に融即することは、前者が後者に同一化していくことである。このことから明らかなように、レヴィナスにとって融即とは、あるものが別のものに同一化していくということである。以上のことを踏まえると、「恐怖はイリヤへの融即である」という一文は、恐怖において自我が非人称としての存在（イリヤ）に同一化していくことを示している。

注目したいことは、このような文脈のなかでレヴィナスが「あらゆる否定のただなかで回帰するイリヤ」と書いていることだ¹⁵。それゆえ、この表現でレヴィナスが言いたいことはおおよそ以下のようなことだろう。つまり、自我が非人称としての存在を如何に否定したとしても、この存在は自我に回帰し、自我を自らに同一化していく、ということだろう。そうだとするとこのことから、非人称としての存在（イリヤ）はそれ自体に準拠している、換言すれば自己準拠であると

推定される。というのも、非人称としての存在は自我の否定にもかかわらず、自我に回帰するのであるから、この存在が準拠しているものは自我ではなく、存在それ自体であるはずだからだ。従って、非人称としての存在、言い換えればイリヤは自己準拠だと確実に見なされている。

III. 結論

論文「イリヤ」のなかでレヴィナスは非人称としての存在、換言すればイリヤを自己準拠だと確実に考えている。

第一章で見たように、レヴィナスは「逃走について」で存在を自己準拠だと見なしている。そして論文「イリヤ」のなかで非人称としての存在を自己準拠だと確実に考えている。とすると、レヴィナスは「逃走について」での存在の考え方を非人称としての存在のうちに見ていると言えるだろう。

ところで、論文「イリヤ」の発表から15年後に刊行された『全体性と無限』のなかでレヴィナスはしばしば非人称としての存在（イリヤ）を問題にしている。では、この書物のなかで言及されている非人称としての存在は自己準拠だと見なされているのか。本稿の考察結果はこの問いに取り掛かる一つの糸口になり得るだろう。とするとこの結果から、レヴィナスの代表作である『全体性と無限』に関するより一層深い理解が得られるだろう。

註

- 1 「イリヤ」と訳出したフランス語は *ilya* であり、この語は「ある」と一般的に訳出されるが、本稿では混乱を防ぐために *ilya* という語を「ある」ではなく「イリヤ」と表記する。
- 2 非人称としての存在、換言すればイリヤはレヴィナス哲学を構成している極めて重要な概念の一つである。このことはレヴィナスの主要概念を収録した『レヴィナス語彙辞典』がイリヤという項目を設けていることから明らかである (Rodolphe Calin et François-David Sebbah, *Le vocabulaire de Levinas*, Paris, Ellipses, 2011, pp. 53-55)。とはいえ、レヴィナスが非人称としての存在を自己準拠だと見なしていることに関する言及はない。ジョエル・アンセルは「逃走について」でのレヴィナスの存在の考え方と論文「イリヤ」がほぼそのまま収録された『実存から実存者へ』

でのそれを比較している (Joëlle Hansel, « “L’être est” et “il y a” : autarcie et anonymat de l’être dans les premiers écrits d’Emmanuel Levinas », dans *Études phénoménologiques. Levinas et la phénoménologie*, t. XXII, n° 43-44, Bruxelles, OUSIA, 2006, pp. 59-74)。そして「逃走について」での存在がレヴィナスによって非人称として考えられてはいないことを明らかにしている。「1936年の試論のなかで問題となっていることは存在の匿名性ではない」 (*Ibid.*, p. 69)。ロドルフ・カランもまたこの点を指摘している。「実際、『実存から実存者へ』とは異なり、存在は、『逃走について』において、イリヤとして考えられてはいない。つまり、匿名的な存在として考えられてはいない [...]」 (Rodolphe Calin, *Levinas et l’exception du soi*, Paris, PUF, 2005, p. 66. 強調はカラン)。しかし、レヴィナスが非人称としての存在 (イリヤ) を自己準拠だと見なしていることは示されてはいない。

- 3 Emmanuel Levinas, « De l’évasion », *Recherches Philosophiques*, 1935, p. 377. 強調はレヴィナス。
- 4 Emmanuel Levinas, « Il y a », *Deucalion*, 1, 1946, p. 145.
- 5 Emmanuel Levinas, *De l’existence à l’existant*, Paris, Revue Fontaine, 1947, p. 12.
- 6 Emmanuel Levinas, « Il y a », *art. cit.*, p. 145.
- 7 *Ibid.*, p. 144. 強調はレヴィナス。
- 8 脚注6の引用文。
- 9 Emmanuel Levinas, « Il y a », *art. cit.*, p. 149.
- 10 *Ibid.*, p. 150. 強調はレヴィナス。
- 11 Martin Heidegger, *Sein und Zeit* [1927], Tübingen, Max Niemeyer Verlag, 2006, p.250.
- 12 脚注9の引用文を参照。
- 13 脚注10の引用文。
- 14 Emmanuel Levinas, « Il y a », *art. cit.*, p. 150. 強調はレヴィナス。
- 15 脚注10の引用文。